



言葉の仕組みと背景を探求し、知る



准教授 田中 明夫

当分野は田中明夫(准教授)とポール・マーティン(講師)の2名で構成され、看護学部の総合科学部門言語学分野の先生方と協力し、医学部、看護学部及び大学院の主に英語教育を担当すると共に言語の研究を行っています。

教育

医学部1年次と2年次前期は、医学英語の基礎を養うための授業を行い、上級者向けの少人数クラスを設置しています。2年次後期では、パラグラフ・ライティングとクラス毎にテーマが異なる授業、3年次前期ではプレゼンテーションの授業をクラス選択制による30名以下の少人数クラス編成で行っています。その他、看護学部2年生対象の授業、大学院修士課程の「国際コミュニケーション学」等を担当しています。



マーティン講師(左)と田中准教授(右)

研究

認知言語学研究：田中明夫

認知言語学は言語学の中では比較的新しい分野で、人間の身体的経験を反映した認知能力に関わる様々な要因を言語現象の説明の基盤としています。私の研究の関心事の一つは、認知言語学で重要な研究テーマであるメタファー(隠喩)です。メタファーは比喩の一種で、従来は修辭的技法として扱われてきました。しかし、メタファーは日常表現の中に普通に見られ、私たちの思考や概念形成の基盤をなしています。例えば、「もうすぐ会津だね。」と「もうすぐ12時だね。」では、前者は字義通りの表現で、後者は時間に関するメタファー表現です。前者を発話する人は文字通り空間を移動して会津に向かっていますが、後者の発話者は実際の移動はしていません。後者の表現は、実際の空間中の移動という概念を時間という抽象概念に写像することによって産出されます(図1)。このように身体的経験を基盤に形成された具体的概念を抽象的概念に写像して具体的な構造を与えることがメタファーであり、

私たちの日常の概念形成に様々な形で関わっています。メタファーは、構文の発現プロセスや分布の問題にも深く関わっており、その解明が現在の私の研究課題です。

図1



西洋古典学研究：ポール・マーティン

「ワーク・ライフ・バランス」は、最近注目されている表現ですが、医師が自分のライフとワークとの関係を考えるのは2千年以上前の*Corpus Hippocraticum* (ヒポクラテス全集)が編纂された時代に溯ります。

*Corpus Hippocraticum*は紀元前3世紀以降に編纂された集典で、古代ギリシャ語のイオニア方言で書かれた当時の医学関連の70余りの文書からなり、その内容や文の品質などは実に多様です。

これらの文書に目を通すと、ピオス(βίος)とテクネ(τέχνη)という語がよく一組として登場することに気がきます。ピオスはlife、つまり「人生」、「生計」であり、テクネはwork、つまり「技術」、「職人の技」、「職業」に相当しますが、*Corpus Hippocraticum*に出るテクネはもちろん「医術」を指します。私の研究の一つは、このピオスとテクネの当時の相互関係と位置づけについての探求です。テクネとピオスは、切り離して、天秤の左右にのせることのできるようなものではなく、今のワーク・ライフ・バランスと違う意味をもつものとして考えられていたようです。また、医師個人の生涯という要素からなるテクネは個人と世代を超えるものであり、いつまでも発展して行くものとみなされていました。(図2は「アスクレピオスの杖」)

図2

